

日本におけるジェイン・オースティン書誌

— 翻訳・翻案書目 1 —

田村道美

凡例

1. 本書目は、1868 [明治元年] より2003 [平成15] 年8月までの間にわが国で刊行されたジェイン・オースティン (Jane Austen, 1775-1817) の作品の翻訳・翻案についての書目である。
2. 本書目作成に当たっては、1点を除いてすべて筆者架蔵本について記事を採用した。架蔵していない1点 (「河出世界文学大系」第16巻として刊行された阿部知二訳『高慢と偏見』) についても、所蔵図書館より借り受け、実物に当たった。
3. 項目の排列は刊行順とし、各項目の前に通し番号を付した。ただし、上・下2巻で刊行された場合には、1-1、1-2という番号の付し方をした。
4. 項目の記載は、訳書名、訳者、初版発行年月日、発行所、定価、収録作品、体裁、構成、表紙・カバー・帯の解説文ないし惹句、使用原書の順とし、最後に筆者による解説を付した。
5. 訳書名は、原則として表紙および扉に記載のものを採り、表紙・扉・奥付等の記載の間に相違がある場合には解説にその旨を記した。なお、訳書名等の漢字・仮名遣いは原本の表記に従った。
6. 初版刊行年については、奥付の記載が元号の場合は西暦に換算し、元号は [] 内に示した。奥付の記載が西暦の場合にも、一貫性を考えて、[] 付きで元号を付した。また、奥付等の数字が漢数字の場合はアラビア数字に改めた。
7. 使用原書については、訳者が解説等で使用した原書を明記している場合、その箇所を「」を付してそのまま引用した。
8. 筆者の解説の冒頭に、訳書の原題とその初版発行年を示した。ただし、少女期の作品については推定執筆年を示した。
9. 訳書の多くでオースティンの肖像画が口絵として使用されている。オースティンの肖像画は姉カサンドラのスケッチ画 (ロンドン・ナショナル・ポートレート・ギャラリー蔵) が唯一のものであるが、別に、甥ジェームズ・エドワード・オースティン＝リーが『思い出のジェイン・オースティン』 (1870) 刊行に際して、その巻頭を飾るためにアンドルーズなる画家に依頼した肖像画がある。口絵等がカサンドラのスケッチ画の場合は、口絵の後に (カサンドラ筆) を、アンドルーズ氏の手になる肖像画の場合には (アンドルーズ筆) を付した。

1-1 『高慢と偏見』上巻

訳者 野上豊一郎

初版発行 1926 [大正15] 年8月30日

発行所 国民文庫刊行會

定 価 非賣品

収録作品 『高慢と偏見』（第1章—第43章）

体 裁 19.2×13.8cm。クロス装、丸背、天金、函。

構 成 扉、はしがき (pp.1-8)、本文 (pp.1-415)、原文 (pp.1-207)。本文中に挿画3葉。

解 説 *Pride and Prejudice* (1813) の本邦初訳本。「世界名作大観」(1925-1929) 全50巻内の第1部(英國篇) 第8巻(第6回配本) として刊行。非売品となっているのは、本全集が予約会員にのみ頒布されたためである。「世界名作大観豫約募集見本及規定」(1925 [大正14] 年3月) を見ると、全巻購入を希望する甲種会員の「會費毎月拂」の額は7円20銭とある。「世界名作大観」は毎月「英國篇」と「各國篇」を各1巻ずつ配本する予定であったから、1巻の定価は3円60銭であったと知れる。

訳者の野上豊一郎(1883-1950) は夏目漱石の門下生であった。「世界名作大観豫約募集見本及規定」の「譯者小傳」の冒頭においても、「夏目漱石の門下、東大英文科出身である。」と紹介されている。森田草平『續夏目漱石』(甲鳥書林、1943 [昭和18] 年11月10日) によれば、木曜会の席で漱石は野上豊一郎たち門下生にオースティンの作品を一再ならず推賞したという。(p.456) したがって、野上豊一郎が『高慢と偏見』を訳した背景には漱石のこの推賞があったと考えられる。「世界名作大観豫約募集見本及規定」の中でこの作品は『驕慢と偏見』のタイトルで次のように紹介されている。

夏目漱石氏の言葉を借用すれば、オーステン女史の此の小説は、實に「寫實の泰斗として百代に君臨するに足る」ものである。女史が浪漫主義全盛の時代に於て而かも、僅かに二十一二歳のかよわい婦人の身を以つて之を書き、ディッケンズ、サッカレを経て今日に至る英國小説の本流に於いて、常に代表的傑作の一つとしてその聲價を墮さないのは誠に驚嘆に値する。當時ウォルター、スコットは舌を捲いて「犬の吠えるやうな太い調子ならば自分にでも出せる。けれども微妙な觸り方で日常平凡な事件や性格を感情の眞實から興味深いものにする手腕に至つては自分には思ひも寄らない」と告白した。女史の最も得意とする性格描寫は、淡々として水の如き叙述の上に築き上げられるのであるが、而かもその鮮やかさは屢々大沙翁と比較された。オーステンの行き方は何よりも非常に戯曲的で、全篇殆んど對話を以つて運び、多少の地の文はあるけれども自然描寫などは僅かに二三行あるのみで、更に不思議なるは容貌服裝に關する叙述を一言半句も費さずして夫々の風采が目に見る如く現はれてゐることである。全篇の骨子としては主人公ダーシイの愛の驕慢と女主人公エリザベスの愛の偏見と此の對照にまつはる多くの興味の中で、殊にエリザベスの聰明な性格が次第に「完全な女性」の方へ自己を造り上げて行く努力の如きは、見方に依つては婦人教養の範を示したものと見ることをも得べく一方に於いて堂々たる寫實派小説の代表作であると同時に、一方に於いては(言葉の正しい意味に於いて) の家庭小説の最良なるものと云ふを得るのである。

周知のとおり、漱石は『文學論』「第七章 寫實法」の中で、「Jane Austenは寫實の泰斗なり。平凡にして活躍せる文字を草して技神に入るの點において、優に鬚眉の大家を凌ぐ。余云ふ。Austenを賞翫する能はざるものは遂に寫實の妙味を解し能はざるものなり」とオースティンを激賞し、『高慢と偏見』の第1章を原文で引用し、それに詳細な解説を施している。さらに *Sense and Sensibility* などについて述べた後、「第七章」の結語の中に、「Austen の *Pride and Prejudice* を草するとき年齒二十を超ゆる事二三に過ぎず、しかも寫實の泰斗として百代に君臨するに足る」(『漱石全集』第9巻「文學論」、岩波書店、1966 [昭和41] 年8月23日、p.381) という一文が見える。「世界名作大観豫約募集見本及規定」の中で漱石の言葉として引用されている「寫實の泰斗として百代に君臨するに足る」はこの箇所から採られたものであるとわかる。

オースティン作品の最初の邦訳『高慢と偏見』と日本において最初にオースティンを評価した漱石との係わりは、別のところにも認めることができる。「世界名作大観」[英國篇]の各巻末には原文が添付されているが、『高慢と偏見』の原文は「故夏目漱石氏珍藏の高價な版に據つて印刷した」(平田禿木訳『高慢と偏見』下巻、「例言」、p.1)という。漱石山房蔵書目録中に *Pride and Prejudice*. London: Macmillan & Co. 1899. (Macmillan's Illustrated Standard Novels)がある。筆者は1898年版を架蔵している。それを見ると、チャールズ・ブロックの挿画が口絵を入れて合計40葉挿入されている。『高慢と偏見』上巻の本文には3葉の挿画が添えられているが、いずれもチャールズ・ブロックのものである。この挿画も漱石所蔵のマクミラン版から採られたことは明らかであろう。

豊一郎は『高慢と偏見』上巻の「はしがき」の最後から2番目の段落で「私の此の訳文は脱稿して5年ばかり抛棄されてあつたのを、此の度印刷に附することになったので、出来るだけまた手を入れて見た」と述べている。この一文から、豊一郎が1921[大正10]年前後にすでに *Pride and Prejudice* を訳していたことがわかる。

豊一郎は1919[大正8]年4月5日発行の『英語文學』第3巻第4号に「「誇と偏見」について」(目次に掲げられたタイトルは「J. Austen の「誇と偏見」に就いて」となっている。)を発表している。これは *Pride and Prejudice* の小説的特徴——戯曲的で性格描写にすぐれていること、自然描写や人物の外観描写がほとんどないこと、地の文より会話の分量が多いこと等——を具体例を挙げて論じたものである。この論文により、豊一郎が *Pride and Prejudice* を精読していたことがわかる。また、このときすでに訳出に着手していたかもしれない。いずれにせよ、当時の豊一郎の胸には漱石が激賞した *Pride and Prejudice* の翻訳を自分の手で世に送り出したいという熱い思いがあったことは想像に難くない。なお、豊一郎は「「誇と偏見」について」の中で、Everyman's Library 版で読んだと記しているから、1921年前後に *Pride and Prejudice* を訳した際に用いた原書は同版であったことは間違いのないであろう。「世界名作大観」(英國篇)第8巻として刊行する前に、訳稿に「手を入れた」というが、その際に所持していた Everyman's Library 版だけでなく、夏目家から借り受けたマクミラン版も参照したかどうかは不明である。

野上豊一郎の妻弥生子は『高慢と偏見』上巻が刊行される1ヶ月前の大正15年7月31日と8月1日の日記に次のように記している。

7月31日

高慢と偏見の校正をする。ペンバリの邸をエリザベスが見物に行つてみるとダーシーに出逢ふところである。今まで色々な角度で屈折してみた二人の関係がいよいよ最後の了解に到しようとする前の最も興味ある場面である。いつもおもふことであるが、長編を書くならこのイキで行かねばならぬ。これで行けば本格小説[で]あると共に、よき意味での通俗小説ともなり得るのである。斯う云ふとあつかひ方一つ長いものを書いて見度い。

8月1日

昨日の校正のすゞきからオースティンがよんで見度く原文でその先をぞつとよんでしまった。先に一度よんだことがあるのでよく分かる。ゼーンとエリザベス、ミス・ベネットとミスター・ベネット、ビングリーとダーシー[、]コリンズ、なんと云ふあざやかな性格描写であらう。これを二十三や四五で書いたのだとおもふと、二十年も文筆にたづさはつてまだ本統の作品一つ書けない自分が愧かしい。(『野上彌生子全集』第Ⅱ期第1巻「日記1」、岩波書店、1986[昭和61]年11月6日、pp.411-2.)

『高慢と偏見』上巻には全61章のうちの第43章までが収められている。「ペンバリの邸をエリザベスが見物に行つてみるとダーシーに出逢ふ」場面は、上巻の最後の章である第43章に描かれてい

る。第34章でエリザベスはダーシーの突然のプロポーズを拒絶する。それからしばらくして、彼女は叔父夫妻と旅に出かけ、たまたまダーシーの大邸宅を見物することになる。一行が屋敷の見物を終え、庭を歩いていると、予定を一日早めて戻ってきたダーシーと鉢合せする。まさに「最も興味ある場面」である。翌日、弥生子は続きが読みたくて、「原文」で残りを読んでいる。彼女の読んだ原書は、『高慢と偏見』上巻と下巻の巻末に原文を付すため豊一郎ないし国民文庫刊行会が夏目家から借り受けたものとも考えられるが、漱石所蔵のマクミラン版は印刷所の方に渡っていたと考えるのが妥当であろう。先に触れたように、豊一郎は「「誇と偏見」について」の中で、自分はEveryman's Library版で *Pride and Prejudice* を読んだ旨明記している。したがって、弥生子がこの時読んだ原書は夫の所持していた Everyman's Library 版と考えられる。

また、「先に一度よんだことがある」とは、かつて漱石からこのマクミラン版を借りて読んだことを指している。中央公論社は昭和40年4月10日に『世界の文学』第6巻として オースティンの最高傑作『エマ』（阿部知二訳）を刊行するが、その月報の最初に弥生子の「はじめてオースティンを読んだ話」と題する文章が収められている。その中で弥生子は「夏目先生に見ていただいたものを書く稽古をしはじめた時、外国の女流の作家はいったいどんな作品を書いているのか勉強して見たい興味にとらわれ」、漱石から「ジェイン・オースティンの“Pride and Prejudice”（自重と偏見）」等を借りて読んだという。明治41年6月26日に漱石が豊一郎宛に出した葉書の中に、「虞美人草をよんでくれて有難い。八重子〔弥生子〕さんにもよろしく。八重子さんにはオースティンは面白くないかも知れない」という箇所がある。この「オースティン」とは漱石が弥生子に貸し与えたマクミラン版 *Pride and Prejudice* と考えて間違いないであろう。また、この葉書の日付けから、弥生子がこの小説を原書で初めて読んだのは明治41年5月か6月頃のことであったと推測される。なお、東北大学附属図書館の漱石文庫には「貸した本」と書かれたノートがあるが、その4頁に「Pride and Prejudice 野上豊一郎」と記された箇所がある。日付はないが、6頁に「Tempest (Methuen) 6月4日 皆川正禧」とあり、9頁には「Jame Psychology 2vols 42年1月26日 野上豊一郎」とあるから、豊一郎が妻弥生子のために *Pride and Prejudice* を借り、「貸した本」に「Pride and Prejudice 野上豊一郎」と記したのは明治41年6月4日以前であることは確実であろう。

ところで、7月31日と8月1日のそれぞれの日記の最後に弥生子が記している感想——「斯う云ふとりあつかひ方で一つ長いものを書いて見度い。」と「まだ本統の作品一つ書けない自分が愧しい。」——は弥生子研究にとってはきわめて重要である。つまり、この野心と慚愧の二つの思いが弥生子を彼女にとって最初の長編小説となる『真知子』の構想・執筆へと導いたからである。昭和2年12月14日、弥生子は『高慢と偏見』を再読し、改めてオースティンの「天才」ぶりに驚嘆している。

オースティンをまたよむ。よむたびに賞讃のまさるのはこの小説である。これこそ一つの自然である、最も虚飾のない、最も平淡な素顔の人世である。これなぞに比べれば、『赤と黒』なぞは隅取りをした役者の顔である。而も書き分けたタイプからすればオースティンの半分も多くはない。これはジュリアン・ソレルの一人芝居である。深刻に於ては勿論まさつてゐるかもしれないが、そのひろさとひろがりにはこの二十三の英国婦人はステンダルのほるか上に坐すべきである。それにしても天才の不思議な力こそ驚異である。

せめてオースティン位は〔と〕おもつてゐた今度の長編もとても及びもつかぬ気がする。これほど行けば万歳であるが。（『野上彌生子全集』第Ⅱ期第2巻「日記2」、岩波書店、1986〔昭和61〕年12月8日、p.199.）

「せめてオースティン位は〔と〕おもつてゐた今度の長編」とは、弥生子がその時まさに執筆を開始しようとしていた『真知子』であり、このフレーズが『高慢と偏見』を念頭に置いて『真知

子』を構想したことを示す確実な証拠であることは拙稿「漱石と豊一郎・弥生子——*Pride and Prejudice* をめぐって——」において指摘したところである。

1-2 『高慢と偏見』下巻 附『克蘭ファド』

訳 者 『高慢と偏見』平田禿木、『克蘭ファド』野上豊一郎

初版発行 1928〔昭和3〕年11月27日

発行所 國民文庫刊行會

定 価 非賣品

収録作品 『高慢と偏見』（第44章—第61章）、ギヤスケル『克蘭ファド』

体 裁 19.2×13.8cm。クロス装、丸背、天金、函。

構 成 扉、例言 (pp.1-4)、『高慢と偏見』本文 (pp.1-224)、『克蘭ファド』はしがき (pp.1-12)、本文 (pp.1-337)、『高慢と偏見』原文 (pp.209-315)。

解 説 *Pride and Prejudice* の本邦初訳本。「世界名作大観」全50巻内の第1部（英國篇）第9巻（第15回配本）として刊行された。

平田禿木（本名は喜一郎、1873-1943）は英文学者、翻訳家、随筆家。「世界名作大観豫約募集見本及規定」の「譯者小傳」において、次のように紹介されている。「夏目漱石、上田敏兩先生の相次いで逝きたる後の我國英文學界に在つては、唯一無二の先輩である。その文壇に於ける地位は、何人と雖もこれを覬覦することを許されない。氏夙に英文學專攻の文部省留學生として、英京倫敦に在ること多年、帰朝後高等師範、學習院等に教授として令名ありしも、その後深く自ら韜晦して、世に出でず、世俗の塵にだも堪へざる玲瓏玉の如き氏の人格は、その蘊蓄と全精力とを擧げて、本會の翻譯に集注せしむるに到つた。氏を惜しむ者、氏を知らんとする者は本會の翻譯書に據る外ない。氏の翻譯は不朽である。又永遠である。」禿木といえばペイター、ワイルド、ハーディー、コンラッド、エマーソン等の代表作の訳者として著名であるが、オースティンとは必ずしも結びつかない。禿木が『高慢と偏見』下巻を訳すに至った事情及び野上豊一郎訳『克蘭ファド』が付録として添えられている理由は「例言」（平田禿木）の次の文章に詳しい。

○『高慢と偏見』下巻の原稿は、野上氏の手で疾く脱稿され、刊行會の金庫へ納まつてみたのであつたが、再閱を請ふべく同氏の許へお届けするその途中に於て紛失の厄に遭ひ、何うしても發見されず、同氏はこれと合巻になるべき『克蘭ファド』の譯に忙しく、再び稿を起されるとあつては、その完成の甚しく遅延するといふので、本年仲夏の頃會の幹部から自分にその執筆を委囑されたのでした。これは野上氏としても何とも不本意のことであられようし、自分としてもちよつと當惑の立場になつたのでしたが、さなきだに配本の方は遅延に遅延を重ねてゐるのであるし、この上多數會員諸氏の御迷惑を加へることは、何とも心苦しい至りといふので、事情已み難くお受け致した次第であります。

○野上氏に『克蘭ファド』の譯をお願い致したのは、『高慢と偏見』下巻だけでは、原譯雙方を合せましても紙數が滿たないので、同じ女流作家ギヤスケル夫人のこの傑作を添へることになりました次第で、この段會に代つて私から申添へておきます。

使用原書について、禿木は「例言」の最後で次のように述べている。

○最後に、『高慢と偏見』には一二異本があり、従つて卷末に添附した原文とこの譯文との間に、幾分相違を來した箇處が一二あるので、その點をちよつと注意しておきたい。異本の相違といふのは、1813年に出た初版原本の不備から來てゐるのである。本書の原文は故夏目漱石氏珍藏の高價な版に據つて印刷したのであるが、その書も亦原初版の誤りを踏襲してゐたので、ブルムレ・ジョンソン氏校訂の一本に據つて譯を進めて行つた、自分のこの譯文と開きを生じ

た次第である。原文277頁最終行から278頁最初の2行へかけてのジェーンの言葉は、何うしても譯文(148頁7、8、9行)のやうに3段に分けて、エリザベスとの掛合にしなければ、意味も通ぜず警句も生きない。これは、初版のこの誤植を指摘したオースチン女史の書簡が遺つてゐるといふことであるから確かである。

「ブリンレ・ジョンソン」とは Reginald Brimley Johnson (1867-1932) である。David Gilson, *A Bibliography of Jane Austen* (Oxford, 1982) によれば、R. B. Johnson が編集した *The Novels of Jane Austen* (in ten volumes) は1892年に J. M. Dent 社から刊行され、1898年にその改訂版が出たという。この小説集はその後別の出版社数社からも何度か刊行されている。

手許にある同小説集の第6刷(1897)第4巻、*Pride and Prejudice*, Vol. 2 で禿木が言及している箇所(p. 162)を見ると次のようになっている。

“How hard it is in some cases to be believed!”

“And how impossible in others!”

“But why should you wish to persuade me that I feel more than I acknowledge?”

【高慢と偏見】下巻の巻末の原文では、上のやり取りは禿木が記しているように Jane 一人が言った言葉となっている。

“How hard it is in some cases to be believed! And how impossible in others! But why should you wish to persuade me that I feel more than I acknowledge?”

また、*Pride and Prejudice*, Vol. 2 の p. 162には次の脚注がある。

This sentence [“How hard it is in some cases to be believed!”] is here separated from the next [“And how impossible in others”] in accordance with a reference in a letter of Miss Austen’s to the page of the first edition on which it occurs. “The greatest blunder in printing is in p. 220 v. 3, where two sentences are made into one.” —ED.

禿木が「例言」に記している異文についての情報はこの脚注から得たものであり、したがって、禿木がこの小説集で *Pride and Prejudice* で読んだ可能性は高い。ただし、R. B. Johnson 校訂の *Pride and Prejudice* が単独で J. M. Dent 社から Everyman’s Library の No. 22として1906年に刊行され、同じ脚注(p. 296)が付されているから、こちらの版で読んだ可能性も考えられる。もし後者であるとすれば、禿木も豊一郎もともに Everyman’s Library 版を用いて *Pride and Prejudice* を訳したことになる。

また、禿木は「例言」の中で、訳出に際しての苦勞についても記している。

○【高慢と偏見】は、嘗て若い人達と一緒に會讀をしたこともあつたのですが、一見平坦なその途に小砂利やうの微細な障害が横はつてゐて、それに躓き、意外の不覺を取ることもあつたので、その積りで取りかゝつたのですが、一字一句如何にも繊細な動きがあり、全體が淡彩ともいふべき行き方で、何等著しき色彩の捉へ處がなく、流石女性のもので、何處までも慎ましやかな、上品な、また、すつきりとしたその筆致は、いざこれを此方の筆に引き移すとなると、更に調子といふものが出て來ず、洗練に洗練を重ねた簡素のその味ひの、如何にしても傳へ難いのに困り果て、仕舞つた。忠實に口移しにやつていけば、教場での解釋そのまゝの生硬なものになつて仕舞ひ、といつてまた碎いてかかれれば、戯作者振りならよいが、野郎言葉、書生言葉の品の下つたものになつて仕舞ふ。野上氏の筆に成つた上巻の方を拜見すると、女流の作といふ斯うした讀物の調子が實によく出てゐ、情意併せ備はつた、誠に立派な出來榮えである。第44章といふ、芝居も既にその中幕以上を過ぎてゐる中途から、飛入りの新參として登場した自分は、ちよつと途惑ひの氣味にもなつたのだが、斯くてはならじと我と獨り意を勵まして、何うにか先づ完成はしたものゝ、その結果は唯、せめて誤譯だけでも少くと、達意を主と

した、こちたき譯註家の凡譯と化して仕舞つたことを、幾重にもお詫びする次第であります。
『高慢と偏見』下巻が刊行されて二週間後、野上弥生子はそれを読み、禿木の訳文に対して「とてもまづい」と手厳しい評価を下している。

[昭和3年] 12月19日

父さん[夫の豊一郎]の訳したオスチンの『誇と偏見』の下巻を平田さんが訳してあるが、とてもまづいのおどろいた。これではちつとも面白くはない。同じ巻にクランフォードを父さんは入れてある。これはまた平明でハイカラなよい訳文である。訳し方一つで実際これほど味の違つたものになるのかとおどろいた。(『野上彌生子全集』第Ⅱ期第2巻、p.337.)

3 『虹の花』

著者 野上彌生子

初版発行 1937 [昭和12] 年12月20日

発行所 中央公論社

定価 2円50銭

収録作品 『虹の花』

体裁 20.7×15.5cm。クロス装、丸背、函。

構成 扉、はしがき (pp.1-2、ノンブルなし)、本文 (pp.1-418)。カット挿画 (小柴錦侍画) 本文中に16葉。

解説 *Pride and Prejudice* の翻案小説。

この翻案はもと『婦人公論』に16回 (第20巻第1号-第21巻第4号) にわたって連載されたものである。連載第1回 (1945 [昭和10] 年1月) の冒頭に「これは19世紀初葉の英國の女流作家ゼーン・オースチンの *Pride and Prejudice* によるものですが、主題も表現もあくまで自由に書き改められ殆んど創作になるであらうことをお断りいたしておきます。」とある。

野上豊一郎訳『高慢と偏見』上巻の解説で見たように、野上弥生子は *Pride and Prejudice* を翻訳と原書で読み、深い感銘を受け、最初の長篇小説『真知子』を完成させた。弥生子の日記を見ると、『真知子』に着手する前に『高慢と偏見』上巻を少なくとも二度読んでいる。弥生子はすぐれた作品に出会うと、「その書物の中の世界が明けても暮れても頭から離れない。」(『野上彌生子全集』第Ⅱ期第1巻、p.403) と大正15年7月18日の日記に記している。これはキューゲルゲン著、伊原元治 [ほか] 譯『一老人の幼児の追憶』(岩波書店、大正14年12月25日) についての感想であるが、『高慢と偏見』についても同じことが言えるであろう。『高慢と偏見』の世界に浸り、さらにはその作品世界を念頭に置きながら『真知子』を2年数ヶ月わたって執筆していった。そんな弥生子にとって『高慢と偏見』の翻案をものすることは容易くかつ楽しい仕事であったろう。

弥生子は『虹の花』の「はしがき」の後半で次のように述べている。

私自身にしても英國の小説や戯曲から好きな女主人公を何人かあげて見よと云はれるならば、このエリザベスをまつ先に擇ぶであらう。まことに彼女の知性と、それを裏づけてある明朗にしてゆたかな才智と、少しの虚飾もない率直と正義感に結びつけられた澁澗とした情熱に引きつけられないものはないと思ふ。彼女はまたバーナード・ショウなどの描く新しい婦人の先驅者とされてあるだけに、他の古典の女性には感じられない一種特別な親しさで私たちを打つのである。私たちは彼女が19世紀の、それもやつと初めの頃に生きた小説中の人物であることをしばしば忘れる。今日の私たちの銀座の舗道を歩かしても、彼女はもつとも活き活きした魅力に輝いて見えるであらう。それ故にこそ私は身近くつねに親しみ愛してあるお嬢さんを紹介するやうな喜びをもつてこの書を私の讀者に贈りたいのである。

ここに、弥生子が『高慢と偏見』に魅せられた理由と『真知子』の執筆動機——エリザベスに当時の東京を歩かせたらどう考え、どう行動するであろうか——を読みとることができる。

『虹の花』は『野上彌生子全集』第Ⅱ期第21巻「翻訳4」（岩波書店、1987〔昭和62〕年9月7日）に収録されている。また、『虹の花』の「はしがき」は『野上彌生子全集』第Ⅰ期第23巻「評論・随筆6」（岩波書店、1982〔昭和57〕年4月7日）にも収められている。

4 『自尊と偏見』上

訳者 海老池俊治

初版発行 1940〔昭和15〕年7月15日

発行所 弘文堂書房

定価 60銭（帯には50銭とある。）

収録作品 『自尊と偏見』（第1巻第1章—第2巻第11章）

体裁 17.5×10.8cm。紙装、角背、カバー、帯。

構成 扉、本文（pp.1—229）、あとがき（p.230）、註（pp.231—234）、解説（pp.236—244）。
使用原本 「譯者が用ゐたテキストは R. W. チャップマン編纂の全集本である。従つて、普通に行はれてゐるテキストのやうに全篇を通じて章を重ねないで、これを3巻に分けてある。なほ右の外、セッカ版全集、ワールズ・クラシックス叢書中のものなどを随時参照した。譯に当つて英文學叢書中の岡田みつ女史の註釈、國民文庫中の野上、平田兩氏の翻譯から多大の御示教を受けた。」
解説 *Pride and Prejudice* の訳本。「世界文庫」37として刊行された。下巻は未刊。

海老池俊治（1911—1968）は英文学者。1934〔昭和9〕年に東京大学文学部英文学科を卒業し、本訳書刊行当時は一橋大学社会学科で教鞭を取っていた。本訳書の「あとがき」に「本譯の執筆・出版について懇ろな御配慮と御鞭撻とを賜つた恩師齋藤先生」とある。「齋藤先生」とは齋藤勇（1887—1982）であろう。齋藤勇は1923〔大正12〕年3月に東京帝国大学文学部助教授、1931〔昭和6〕年10月に東京帝国大学教授となり、1947〔昭和22〕年9月に東京帝国大学を定年退職した。海老池が「世界文庫」の翻訳陣の一人に名を列ねることができたのは、東京大学での恩師齋藤勇の推挽があったためと思われる。

筆者は『自尊と偏見』上を2冊架蔵しているが、内1冊の扉にはペン書きで「中野先生 海老池俊治」と記してある。この「中野先生」とは中野好夫（1903—1985）と思われる。東京女子高等師範学校助教授であった中野が、齋藤勇の大抜擢により東京帝国大学助教授となったのは1935〔昭和10〕年である。海老池俊治が東京大学文学部英文学科を卒業したのは1934年であるから、中野から直接教えを受けたことはなかったと思われる。しかし、当時東大の英文学科は雑誌『オベロン』を発行しており、中野がこの雑誌を主宰していたという。海老池は『オベロン』第2巻第1号（オベロン社、1938〔昭和13〕年1月13日）に「ジェイン・オーステンの作品（前半）」を、同第2巻第2号（1938〔昭和13〕年8月1日）に「ジェイン・オーステンの作品（後半）」を掲載している。中野は『オベロン』第2巻第1号に「膨張する英國——英國史からの一頁——」を發表し、同第2巻第2号には「忙中無閑記——カーライルと世代に就いて」と題する書評を寄せている。さらに、同第2巻第2号奥付には代表者として中野の名が掲げられている。（第2巻第1号の代表者は加納秀夫。）海老池は中野を先生と呼んで当然の関係にあったと考えられる。

『自尊と偏見』「あとがき」には「「解説」は雑誌「オベロン」第2巻第1号及び第2号に掲載した拙稿を抜書して、筆を加へたものである。」とある。ここでいう「拙稿」とは先に挙げた「ジェイン・オーステンの作品（前半）」と同「（後半）」を指している。

海老池が *Pride and Prejudice* をきわめて高く評価していたことは「解説」中の次の文章から知

ることができる。

その適確な性格描寫、整然たるいはゞ天衣無縫の構成、鋭い叡知、豊かな人間的包容力、決して極端に走らない中正な判断、冷静な客觀的態度——即天去私といふ標語を唱へた晩年の夏目漱石を感服させたもの、を發見して頂きたい。(略)

〔『自尊と偏見』は〕ジェインの全作品中最も有名で、後半三作に比べて、落ち着いた澁い完成の點からいつて一步を譲るものではあるが、洗滌とした鮮かさに於ては最も優れてゐるといへよう。最初に一言した性格描寫の適確さや鋭い叡知——人間喜劇を描出する作家的技能の卓越さは何人にも直ちに肯はれるところであらう。作中人物のなかでも、コリンズなどは、「饗應の禮状」といふ意味の普通名詞になつたほど喧傳されてゐる。女主人公エリザベス・ベネットに至つては、その聰明さと誠實さとが世々の若人の胸に親しい心像となつて生きる永遠の女性である。(pp. 236-243.)

海老池は1958-9年に、米国のイエール大学でオースティン研究に没頭し、その研究成果を『Jane Austen 論考』(研究社出版、1962〔昭和37〕年7月25日)として公にしたが、その「まえがき」冒頭に、「Jane Austen はわたしが学生時代から愛読して来た作家である。」と記している。これによつても、海老池のオースティンに対する傾倒ぶりを知ることができる。なお、この論考は恩師齋藤勇に捧げられている。

海老池がテキストとして用いた「R. W. チャップマン編纂の全集本」は、『Jane Austen 論考』の「書誌抄」に掲げられた *The Novels (Works) of Jane Austen, 6 vols., ed. by R. W. Chapman, 1923-54.* を指すと思われる。訳出に際して参照した「セッカ版全集」とは、*The Adelphi Edition of the Works of Jane Austen. 7 vols. (London: Martin Secker, Number Five John Street Adelphi, 1923.)* であらう。なお、この全集は1927-39年に何度か版を重ねたという。「ワールツ・クラシックス叢書中のもの」とは、*The World Classics, No. 333* として刊行された *Pride and Prejudice. With and introduction by R. W. Chapman (London; Humphrey Milford Oxford University Press, 1929.)* であらう。また、「英文学叢書中の岡田みつ女史の註釈」は「研究社英文学叢書」第2輯第3回配本として刊行された岡田みつ註釈『*Pride and Prejudice*』(研究社、1923〔大正12〕年3月20日)である。

5 『説きふせられて』

訳者 富田彬

初版発行 1942〔昭和17〕年2月25日

発行所 岩波書店

定価 80銭 ㊦

収録作品 『説きふせられて』

体裁 14.8×10.3cm、紙装。

構成 扉、本文 (pp. 3-358)、解説 (pp. 359-368)。

解説 *Persuasion* (1818) の本邦初訳本。「岩波文庫」2959-2962として刊行された。

筆者は『説きふせられて』の初版本意外に、第3刷、第4刷を所持している。ともに帯付きであるが、帯に印刷された惹句が異なっているので紹介しておく。

「何か特別の美しさをもつこの作品は、“高慢と偏見”の作者オースティン最後の作品で人間的並びに作家的變貌を示すものといわれる。」(1955〔昭和30〕年12月24日第3刷発行 定価160円)

「愛しながらも周囲に説得されて婚約者と別れたアン、切ない愛の悲しみを美しい秋の自然の中に描きだしたオースティン最後の小説。」(1989〔平成1〕年3月17日第4刷発行 定価

600円)

なお、第4刷では文庫番号が32-222-3(赤222-3)に変わっている。これは「1974(昭和49)年3月以後、表紙には星番号ではなく分野別・著者別番号を印刷するようになった」(『岩波文庫総目録1927-1987』岩波書店、1987[昭和62]年7月16日、p. vi.) ためである。

富田彬(1897-1971)は英米文学者で、当時は立教大学文学部教授の職にあった。富田には、訳書として、ソーロー『市民としての反抗』(岩波文庫、1949[昭和24]年8月25日)やヴァージニア・ウルフ『ダロウェイ夫人』(角川文庫、1955[昭和30]年7月5日)等があるが、後に見るように、オースティンの作品も *Persuasion* の外に *Pride and Prejudice* と *Northanger Abbey* を訳している。ただし、富田がオースティンに心酔していたという訳ではなかったようである。富田のオースティン評価は「解説」の次の箇所に窺うことができる。

作者は實生活や作品の中で自分自身の神や人間の生き方(モラル)を探究してゐるのではなく、社會からモラルを興へられて、それを作品といふお皿の中へ綺麗に盛つて差し出してゐるやうなところがあるのだ。

しかし今の僕には、果してチェーン・オースティンを上述の批評の中へ閉ぢこめてしまつていいのかどうか、まだはつきりした自信は持てない。兎も角一通りの才女ぐらゐのひとではなく、日本と外國とを問はず、他の女流作家の作品と讀みくらべてみると、彼女がいかに人間的幅や奥行きに於て勝れてゐるかを感じさせられるので、ひよつとして僕の位置からでは捉へられない何かはまだあるのかもしれないといふ不安がある。(pp. 364-5.)

オースティン賛美者の一人であった作家の中村真一郎(1918-1997)は学生時代に富田訳『説きふせられて』を讀んだという。

オースティンは私の少年時代からのごひいきの作家で、30歳にならないうちに、彼女の6つの長篇を全部讀んでしまつていて、彼女がもっと長生きをして、もっといい作品を續々と残してくれていないことを、大いに残念に思つていた。

特に彼女が40歳になつて書き、遺作として發表された『説き伏せられて』を、戦前の学生時代に富田訳で讀んで、若い頃の彼女のあの才女振りが、円熟した味に變つて行く徴候をそこに見出してゐた私は、その時点で彼女の文学的経歴が中断されたことが、いかにも口惜しかった。

そこで別の訳者による新訳が出るたびに、丁度、別の指揮者による同じ交響曲のレコードを買い直すようにして、中野好夫で『自負と偏見』を讀み直したり、阿部知二訳で『エマ』を再讀したりして、私のオースティンへの欲望をなぐさめた。「ひとりの作家に凝る——『スーザン夫人』」『本を讀む』新潮社、1982[昭和57]年7月20日、pp. 207-8.)

『説きふせられて』奥付の定価のところに印刷されている㊦について説明しておきたい。これは、昭和14年9月18日に出た価格停止令を受けて印刷されたものである。昭和12年7月7日の蘆溝橋事件をきっかけとして日中戦争が起こり、その結果、国内では次第に物資が不足しはじめ、インフレと相俟つて物価が高騰するようになった。政府は物価の高騰を抑えるため、昭和12年に「暴利取締令」を出し、13年には「公定価格」を採用し、14年9月18日には「価格停止令」を出し、価格を9月18日の水準に固定してしまうという強行措置を採つた。そして、暴利取締令の改正により、昭和15年6月24日以降に刊行される雑誌や単行本にも定価の箇所に㊦を刷り込むことが義務付けられたのである。

6 『愛と友情』

訳者 大久保忠利

初版発行 1943[昭和18]年3月16日(2,000部)

発行所 實業之日本社

定 価 ㊦1円50銭

収録作品 「愛と友情」、「レスリー城館」、「英國史」

体 裁 18.3×13cm。仏装、角背。

構 成 扉、まへがき (pp.3-16)、「愛と友情」(pp.17-103)、「レスリー城館」(pp.106-177.)、「英國史」(pp.179-210)、譯者の言葉 (pp.211-215)。

解 説 オースティンの少女期に書かれた“Love and Freindship(sic)”(1790)、“The History of England”(1791)、“Lesley Castle”(1792)の本邦初訳本。

大久保忠利(1909-1990)は言語学者・国語教育学者であった。また、S. I. ハヤカワ『思考と行動における言語』(岩波現代叢書、1951[昭和26]年12月20日)の訳者としても知られている。大久保がなぜオースティンのこの作品を訳したかは不明であるが、『夢とおもかげ 大衆娯樂の研究』(中央公論社、1950[昭和25]年7月30日)に「徳川夢聲のおかしみ——コトバと笑」と題する大久保の文章が収録されている。また、『コトバの切れ味とユウモア』(春秋社、1958[昭和33]年6月5日)を刊行している。この二つのタイトルから、大久保がユーモア表現にも強い関心を抱いていたことがわかる。そのような関心から、ユーモアとアイロニーを得意とするオースティンの作品に親しんでいたのかもしれない。いずれにせよ、大久保がオースティンを高く評価していたことは「譯者の言葉」中の次の一節に窺うことができる。

オースティンの作風は、材を自分の身のまはりに取り、18世紀末の地方中流家庭の平凡な日常生活が克明に描かれてをります。けれど人間としての深い所を究めて行つたこのひとは、心に愛が満ち、その眼は、あくまでも健全な人生批評に磨かれ、人物の性格描寫の明確さ、叙述の鮮明さ、温い精神の中にひらめく鋭い諷刺の筆鋒は、英國小説史にもあまり類を見ないといはれ、スコットも彼女の“Pride and Prejudice”(自負と偏見)を讀んでは、(略)と賞讃したものでした。(pp.212-3.)

本訳書の冒頭に置かれた「まへがき」は訳者のものではなく、G. K. チェスタトンのそれを訳したものである。チェスタトンの序文の付いた *Love and Freindship and Other Early Works, now first printed from the original MS. by Jane Austen, with a preface by G. K. Chesterton* は1922年にイギリスの Chatto & Windus 社とアメリカの Frederick A. Stokes Company 社から刊行された。大久保の用いた原書はこの二つのうちのいずれかであろう。

大島一彦氏は『ジェイン・オースティン 「世界一平凡な大作家」の肖像』(中公新書、1997[平成9]年1月25日)の「第1章 礼讃と批判」の中で、オースティンを高く評価した文学者の一人として G. K. チェスタトンを挙げ、『G. K. チェスタトン著作集8 ヴィクトリア朝の英文学』(春秋社、1979[昭和54]年4月10日)の一節をその例証として紹介している。その一節と『愛と友情』に付された序文を合わせ読むことにより、チェスタトンの慧眼ぶりを知ることができる。

「愛と友情」は都留信夫監訳『美しきカサンドラ ジェイン・オースティン初期作品集』(鷹書房弓プレス、1996[平成8]年11月10日)に収録された新訳で読むことができるが、こちらは R. W. チャップマン編 *The Novels (Works) of Jane Austen (Oxford)* の第6巻 *Minor Works* (1954)を基に訳したものであり、G. K. チェスタトンの序文は付されていない。したがって、チェスタトンの序文が読める大久保忠利訳『愛と友情』は貴重である。なお、この『愛と友情』は『ジェイン・オースティン著作集』全5巻(文泉堂出版、1996[平成8]年9月5日)の第5巻として復刻された。

主要参考文献

- 池田哲郎『日本英学風土記』（篠崎書林、1979〔昭和54〕年7月7日）
- 石塚虎雄『ジェイン・オースティン研究』（興文社、1969〔昭和44〕年4月15日）
- 石塚虎雄『ジェイン・オースティン小説論』（篠崎書林、1974〔昭和49〕年8月25日）
- 伊吹知勢『オースティンとウルフ——伊吹知勢論文集——』（伊吹令人、1984〔昭和59〕年4月11日）
- 『岩波文庫総目録 1927-1987』（岩波書店、1987〔昭和62〕年7月16日）
- 榎本みな子『オースティンの小説とその周辺』（英宝社、1984〔昭和59〕年12月10日）
- 海老池俊治『Jane Austen 論考』（研究社出版、1962〔昭和37〕年7月25日）
- 大内脩二郎『英米文学評傳叢書37 ジェイン・オースティン』（研究社、1934〔昭和9〕年8月20日）
- 大島一彦氏『ジェイン・オースティン 「世界—平凡な大作家」の肖像』（中公新書、1997〔平成9〕年1月25日）
- 岡田みつ註釈『Pride and Prejudice』（研究社、1923〔大正12〕年3月20日）
- 落合雄三編『栃木県近代文学アルバム』（栃木県文化協会、2000〔平成12〕年7月15日）
- 笠原勝郎『英米文学翻訳書目 各作家研究書付』（沖積社、1990〔平成2〕年7月7日）
- 笠原勝郎『昭和を彩った英文学者たち——生涯と書誌』（沖積社、1996〔平成8〕年12月18日）
- 近藤いね子『英國小説と女流作家——オースティンとウルフ——』（研究社出版、1955〔昭和30〕年12月25日）
- 国立国会図書館編『明治・大正・昭和翻訳文学目録』（風間書房、1959〔昭和34〕年9月25日）
- 塩谷清人『ジェイン・オースティン入門』（北星堂書店、1997〔平成9〕年3月18日/増補版2001〔平成13〕年3月21日）
- 鈴木美津子『ジェイン・オースティンとその時代』（成美堂、1995〔平成7〕年1月25日）
- 「世界名作大観豫約募集見本及規定」（1925〔大正14〕年3月）
- 『漱石全集』第9巻「文学論」（岩波書店、1966〔昭和41〕年8月23日）
- 惣谷美智子『ジェイン・オースティン研究——オースティンと言葉の共謀者達——』（旺史社、1993〔平成5〕年6月20日）
- 田辺昌美『ジェイン・オースティンの文学』（あほろん社、1965〔昭和40〕年2月1日）
- 田辺昌美『改訂 ジェイン・オースティンの文学』（あほろん社、1981〔昭和56〕年10月25日改訂版2刷）
- 田村道美「漱石と豊一郎・弥生子——*Pride and Prejudice*をめぐる——」『香川大学教育学部研究報告第I部』第84号（香川大学教育学部、1992〔平成4〕年1月）
- 田村道美「野上弥生子と「世界名作大観」（五）——『高慢と偏見』上巻——」『香川大学教育学部研究報告第I部』第93号（香川大学教育学部、1995〔平成7〕年1月）
- 田村道美『野上弥生子と「世界名作大観」——野上弥生子における西欧文学受容の一側面——』（香川大学教育学部研究叢書7、1999〔平成11〕年1月）
- 田村道美〔ほか〕『絶版文庫三重奏』（青弓社、2000〔平成12〕年9月15日）
- 津田塾大学「文学研究」同人編著『ジェイン・オースティン——小説の研究——』（荒竹出版、1981〔昭和56〕年4月20日）
- 東大英文学研究会編『オペロン』第2巻第1号（オペロン社、1938〔昭和13〕年1月13日）
- 東大英文学研究会編『オペロン』第2巻第2号（オペロン社、1938〔昭和13〕年8月1日）
- 直野裕子『ジェイン・オースティンの小説——女主人公をめぐる——』（開文社出版、1986〔昭和61〕年3月30日）
- 中村真一郎『本を読む』（新潮社、1982〔昭和57〕年7月20日）
- 日本アソシエーツ編『世界文学総覧シリーズ1 世界文学全集・内容総覧』上・下（日本アソシエーツ、1986

- [昭和61]年2月10日)
日本アソシエーツ編『世界文学綜覧シリーズ2 世界文学全集・作家名綜覧』上「西洋人名」(日本アソシエーツ、1986 [昭和61]年5月10日)
日本アソシエーツ編『世界文学綜覧シリーズ3 世界文学全集・作家名綜覧』上・下(日本アソシエーツ、1986 [昭和61]年7月10日)
日本アソシエーツ編『翻訳図書目録45/76 Ⅲ. 芸術・言語・文学』(日本アソシエーツ、1991 [平成3]年3月25日)
日本アソシエーツ編『翻訳図書目録77/84 Ⅲ. 芸術・言語・文学』(日本アソシエーツ、1984 [昭和59]年12月25日)
日本アソシエーツ編『翻訳図書目録84/88 Ⅲ. 芸術・言語・文学』(日本アソシエーツ、1988 [昭和63]年7月22日)
日本アソシエーツ編『翻訳図書目録88/92 Ⅲ. 芸術・言語・文学』(日本アソシエーツ、1992 [平成4]年12月21日)
日本アソシエーツ編『翻訳図書目録92/96 Ⅲ. 芸術・言語・文学』(日本アソシエーツ、1997 [平成9]年7月25日)
日本アソシエーツ編『翻訳図書目録1996-2000 Ⅲ. 芸術・言語・文学』(日本アソシエーツ、2000 [平成12]年1月26日)
日本アソシエーツ編『全集・合集収載翻訳図書目録45/75 Ⅲ. 芸術・言語・文学』(日本アソシエーツ、1996 [平成8]年5月20日)
日本アソシエーツ編『全集・合集収載翻訳図書目録76/92 Ⅲ. 芸術・言語・文学』(日本アソシエーツ、1996 [平成8]年4月21日)
日本アソシエーツ編『翻訳小説全情報45/92』(日本アソシエーツ、1994 [平成6]年1月20日)
日本アソシエーツ編『翻訳小説全情報93/97』(日本アソシエーツ、1999 [平成11]年2月26日)
日本アソシエーツ編『翻訳小説全情報1998-2000』(日本アソシエーツ、2001 [平成13]年9月25日)
野上豊一郎「「誇と偏見」について」『英語文学』第3巻第4号(緑葉社、1919 [大正8]年4月5日)
『野上彌生子全集』第23巻「評論・随筆6」(岩波書店、1982 [昭和57]年4月7日)
『野上彌生子全集』第Ⅱ期第1巻「日記1」(岩波書店、1986 [昭和61]年11月6日)
『野上彌生子全集』第Ⅱ期第2巻「日記2」(岩波書店、1986 [昭和61]年12月8日)
『野上彌生子全集』第Ⅱ期第15巻「日記15」(岩波書店、1989 [平成1]年7月27日)
『野上彌生子全集』第Ⅱ期第21巻「翻訳4」(岩波書店、1987 [昭和62]年9月7日)
長谷川なほみ「Jane Austen 翻訳書目」『文献探索 2000』(金沢文圃閣、2001 [平成13]年2月23日)
樋口欣三『ジェーン・オースティン——喜劇的ヴィジョンの展開——』(英宝社、1984 [昭和59]年3月1日)
蛭川久康著訳『講座イギリス文学作品論3 ジェイン・オースティン』(英潮社、1977 [昭和52]年7月1日)
藤田清次『評伝 ジェーン・オースティン』(北星堂書店、1981 [昭和56]年3月20日)
宮崎孝一『オースティン文学の妙味』(鳳書房、1999 [平成11]年3月21日)
森田草平『續夏目漱石』(甲鳥書林、1943 [昭和18]年11月10日)
柳内茂雄『オースティンの手法』(リーベル出版、1988 [昭和63]年11月22日)
G. K. チェスタトン著、安西徹雄訳『G. K. チェスタトン著作集8 ヴィクトリア朝の英文学』(春秋社、1979 [昭和54]年4月10日)

クレア・トマリン著、矢倉尚子訳『ジェイン・オースティン伝』（白水社、1999 [平成11] 年10月5日）
デアドリール・ル・フェイ著、川成洋監訳・太田美智子訳『大英図書館シリーズ作家の生涯 図説ジェイン・
オースティン』（ミュージアム図書、2000 [平成12] 年。月日の記載なし。)

The Novels of Jane Austen, 10 vols. Edited by R. B. Johnson. London : J. M. Dent & Sons Ltd, 1892.

The Novels (Works) of Jane Austen. 6 vols. Edited by R. W. Chapman. London : Oxford University Press, 1923
-54 [reprint 1973].

Austen, Jane, *Pride and Prejudice*. London : Macmillan & Co. 1898.

_____. *Pride and Prejudice*. Everyman's Library, 1906 [reprint 1941].

_____. *Love and Freindship and Other Early Works*, now first printed from the original MS. with a preface by G.
K. Chesterton. [London]: Chatto & Windus, 1922.

Gilson, David. *A Bibliography of Jane Austen*. Oxford : Clarendon Press, 1982